

日本民家園だより

特集 旧太田家住宅

vol.77

企画展示「常陸の民家 -旧太田家住宅-」
2012年7月1日(日)～11月4日(日)
『日本民家園収蔵品目録17 旧太田家住宅』刊行

はじめに

重要文化財旧太田家住宅は、笠間焼や笠間稲荷で知られる茨城県笠間市より移築されました。

太田家のあった片庭地区は、峠を越えるとすぐ栃木県という場所にあります。標高96mのこの地で、太田家は農業を営み、代々名主を務めてきたと言い伝えられています。明治以降も地域の戸長や区長を務め、旧片庭村の村長を務めたこともありました。

今回は聞き取り調査の結果をもとに、太田家の暮らしについてご紹介していきましょう。時代的には、昭和20年代から解体のはじまった昭和43年(1968)までの話が中心です。

2つの屋根

太田家は「分棟型民家」といい、主屋と土間それぞれに屋根があります。屋根が2つあるということは、あいだに谷間が出来るということであり、そのため家の真ん中に大きな雨樋がありました。屋根は茅葺きですからこの樋はゴミが詰まりやすく、そうなるとすぐに水があふれてしまいます。これを防ぐため、大雨のときは夜中でも屋根に上り、ゴミを取り除いたそうです。

ホリと井戸

主屋東側のウラドを出ると、すぐにホリ(用水堀)がありました。太田家で井戸を掘ったのは昭和30年代のことで、それまではこのホリから水を汲み上げていました。

洗濯に使っていたのも、風呂に使っていたのも、もちろんこの水です。石で固めた岸には、一段低くなっている「ツカイッパタ」という洗い場があり、ここで、一年中洗濯していました。フロは、移築直前はウラドを入れてすぐの場所にありました。ホリに一番近い場所です。しかし、昭和20年代までは正面のオオドを入ったところにありました。これについて、民家園初代園長の古江亮仁氏が愛知県新城市の興味深い事例を紹介しています。この住宅も太田家と同じ分棟型民家ですが、やはり同じ位置に風呂を設けていました。そして、2つの屋根の谷に設けられた雨樋から水を取って風呂に使っていたということです。太田家で雨水を使っていた話は残っていませんが、元の風呂はちょうど雨樋の真下に当たりますので、何らかの形で利用していた可能性はあります。

カマドとイロリ

朝起きるとまず、主婦は火を起こします。カマドで御飯を炊き、イロリで味噌汁を作るのです。土間にはカマドが大小3つありました。コガマ2つは炊飯と調理に、オオガマはお湯を沸かしたり、味噌造りで大豆を煮たりするのに使いました。一方、イロリは

イタバと呼ばれる上がり口の部屋にありました。イロリには、大きく分けると調理と暖房という2つの機能があります。プロパンガスが入った後もカマドが炊飯に使われたのに対し、イロリの方は調理には使われなくなっていきました。また、暖房用途としても、次第に薪の代わりに炭を燃やし、コタツとして使うように変わっていきました。

馬とウマヤ

一方、当主は起きるとまず、馬に食べさせるための草を刈りに行きました。帰ってくると次は、馬に飲ませるためのお湯を沸かします。水も冷たいまま飲ませるのではなく、米のとぎ汁などを温めてから与えるのです。移築前は土間の中に張り出すようにウマヤが設けられており、太田家はここで馬を1頭飼っていました。この馬は農作業用でしたが、肥料の製造装置でもありました。ウマヤの地面はわざと傾斜が付けてあります。肥料として利用するため、馬のオシッコが1か所に溜まるようになっていたのです。

家の中

床上は大きく南側と北側に分かれ、南側には3つの座敷が、北側には寝部屋やナンドが並んでいました。チャノマは家族の居間であり、神棚が設けられていました。養蚕を行っていた時代、棚を組んだのも



この部屋です。ナカノマは、古くは仏壇にお参りする部屋でした。お産にもこの部屋が使われたようです。オクノマは、床の間と押入のある一番良い座敷でした。ひな人形やお盆のボンダナは床の間の前に飾りました。葬式の時、ホトケサマを寝かせるのもこの部屋でした。

北側にはまず食事場所として使われていたカッチェがありました。続いて、ヘヤと呼ばれる六畳と三畳の寝部屋がありました。仏壇は古くは六畳の部屋に置かれ、ナカノマからお参りするようになっていましたが、その後、カッチェに移されました。一番奥はナンドと呼ばれる物置でした。民家園に寄贈された大量の古文書が保管されていたのがこの部屋です。

娯楽の少ない時代、太田家で映画を上映することがありました。こうしたときは土間を客席にし、部屋の間仕切りのところにスクリーンを張ったそうです。

生業

太田家の家業は農業でした。米を中心に、麦やソバ、落花生やサツマイモなどを栽培していましたが、農業だけで生活するのは難しく、冬場は昭和40年(1965)ごろまで炭焼きや薪の出荷をしていました。

炭焼きの窯は近くの山にあり、太田家では通いで焼いていました。原木として使っていたのはカシやクヌギです。焼き上がった炭はカヤで編んだ自家製の炭俵で出荷しました。薪にしていたのは主にナラやクヌギです。山で割り、ソリを使って下ろし、束にして出荷しました。いずれも出荷先は笠間市内で、軽トラックが入る前は耕耘機で運搬していました。

このほか養蚕も行っていました。ただしこれは短期間でやめ、その後2年ほどは、カイコ飼育用のカゴを利用して乾燥芋の製造を行っていたそうです。

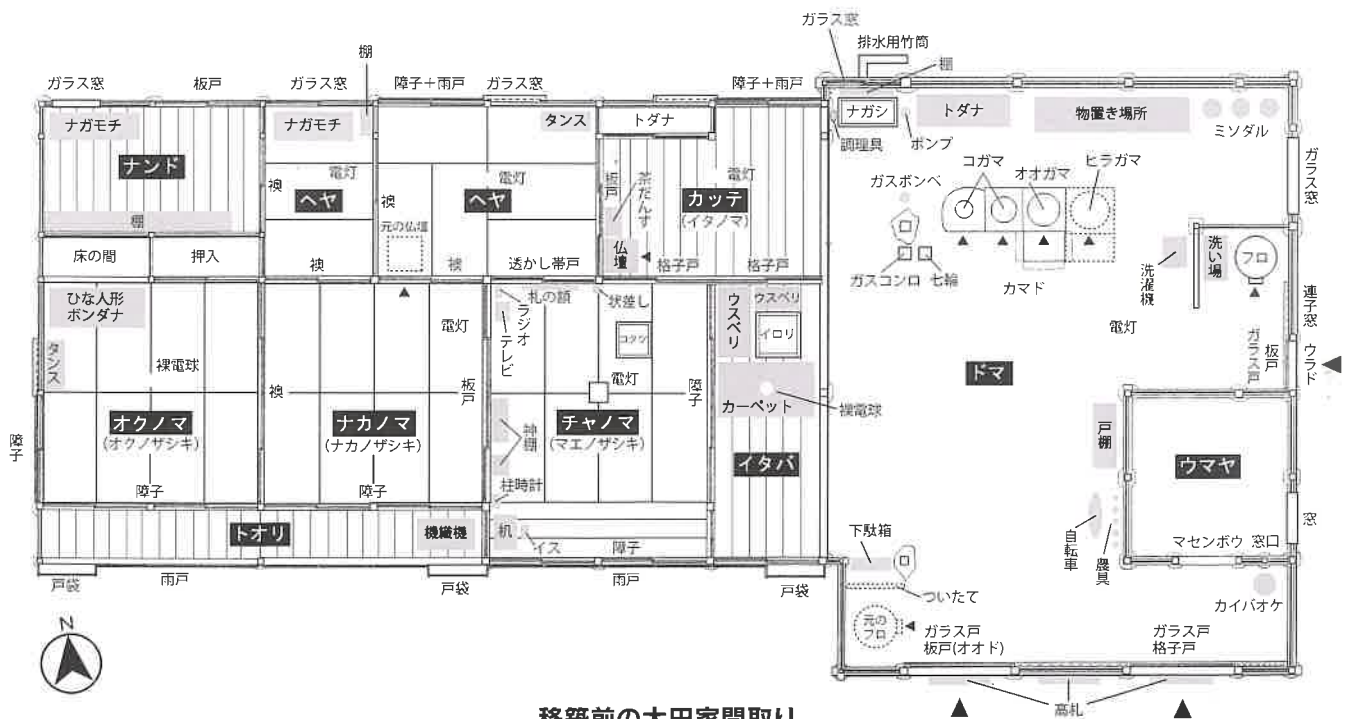
なお太田家の古文書には、和紙を上納した記録が残っています。実態は不明ですが、太田家もしくは太田家周辺で紙漉きを行っていたことは間違いありません。

土葬と両墓制

最後に太田家の墓地についてふれておきましょう。この地域は平成6、7年(1994、95)ごろまで土葬でしたが、埋葬する場所と墓石を建てる場所が異なっていました。こうした方式を「両墓制」といいます。土葬の場合、まず大きな穴を掘らなければなりません。この穴を掘る役を「トコトリサン」といい、記録に基づいて4人が公平に選ばれました。トコトリサンは穴を掘るだけでなく、お棺を担ぐ役も務めました。埋葬を終えると、その場所に石碑ではなく、木製の碑を建てます。これを「モクヒ(木碑)」といいます。移築時の当主守彦さんのものは、30cm角、高さ3mという大きなものでした。

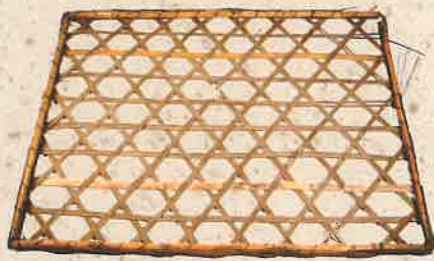
亡くなって100日までは、埋葬した場所にお参りに行きました。これを過ぎると、埋葬した場所と墓石のある場所両方にお参りしました。お彼岸の墓参りも両方でした。掃除も花の用意も大変だったそうですが、火葬に変わったのをきっかけに、現在は墓石がある方のオハカに統合されています。

(文/渋谷卓男 図面/小澤葉菜 写真/畑山拓登)



移築前の太田家間取り

太田家関係資料



養蚕籠
ようさんかご
 蚕を飼うための籠。



布押機
ぬい
 織った布を平らにするために使用した。



おぼえ
覚 (御用紙納方・御用紙値段付覚・田方年貢覚ほか)
 寛政11年～12年(1799～1800)。片庭村で生産された紙の値段などが書かれている。



ソリ
はんしゅう
 伐り倒した木材を山から搬出するために使用した。



高札
 慶応4年(1868)。太政官から出された五俵の掲示の1枚。



マンゴク
か
 主に米から糠やくず米を取り除くために使用した。



スルス
す
 稲の粉を摺り、糊殻を取り除くための臼。



片庭村絵図
 明治10年(1877)3月。太田家のあった片庭村全体を描いた絵図。